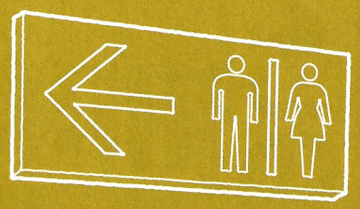
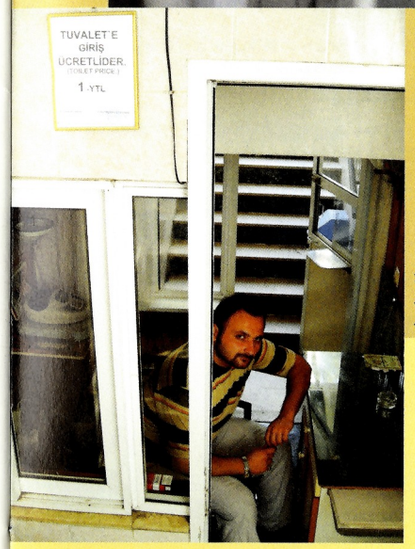
特集

トイレ

トイレには国や地域の文化が如実にあらわれる。トイレは人体からの老廃物を処理するだけでなく、それらを資源やエネルギーに変える装置にもなる。この特集では、世界のトイレ文化をはばかりなく語り、人類の将来をじっくり考えてみたい。



断水に備え、トイレ用の水を用意する（トルコ）



公衆トイレでは、入り口の男性に金を払って入場する（トルコ）

メタンガス・トイレ設備の一角を占める豚小屋（中国）

トイレの文化、文化のトイレ

スチュアート ヘンリ

放送大学教授

トイレで「文化」を知る

「はばかり」ともいわれてきたトイレは、そのとおり現在、憚（はばか）られる話題である。きわめてプライベートとされるトイレと排泄について、すすんで語る人は、近代日本をはじめ、自称「文明人」には少ないと思われる。しかし、トイレは「文化」を知るうえで、役に立つ研究分野でもある。それぞれの民族や国民によって異なるトイレや用便のあり方があり、密室化するところもあれば、かなり開放的なところもある。

用足しをするときの羞恥心（しゅうちしん）について、トイレは多くを教えてくれる。お隣の中国では、最近までは仕切りのないトイレが井戸端会議ならぬ便所端会議の場所であった。今は少なくなっているかもしれないが、わたしの若いときの日本男児なら「連れション」もごく普通であった。

一八世紀のイギリスやフランスでは、領主が便器に座って用足しをしながら部下に指示を与えたり、談義に花を咲かせたりするという記録もある。

逆に、アフリカのある民族においては、男性が用を足す行為はあまりにも恥ずかしいことなので、成人式で肛門をふさぐ儀式をおこなうほどであった。アイヌ民族の伝承でも、女性は顔をかくして用足しをしたと伝えられている。

わたしが自分の「羞恥心」を思い知らされたのは、アメリカのある空港でのトイレ経験である。男便所なので、小用の便器が並んでいる壁の反対側に大用の便器が並んでいた。ところが、便器と便器のあいだに仕切りはあるものの、前の扉がない！便意をもよおしていたわたしだったが、便意が急に消えてしまい、そのトイレで用足しをせず後にした。

ベトナム北部の農村では、屋敷地の中庭に、井戸（手前）、家畜小屋（左奥）、便所（右奥）が置かれ、人畜の糞尿は肥料として利用される

トイレ文化の画一化

現在の日本のトイレ事情はひと昔前とは大きく変化している。和式の便器が洋式に変わり、「ボットン式」の汲（く）み取りトイレなんぞはほとんど姿を消している。谷崎潤一郎著の『厠（かわや）いろいろ』には、「ほんのりと淡い匂がある。それは臭気止めの薬の匂と、糞尿の匂と、庭の下草や、土や、苔などの匂の混合したものであ」り、「便所の匂には一種のなつかしい甘い思ひ出が伴ふものであ」り、「幼時の記憶がよみがへって来て、ほんたうに我が家に戻って来たなあといふ親しみが湧く」と書かれている。トイレの匂いで幼児の記憶がよみがえり、郷愁を感じる人は現在、いるだろうか。

三〇年以上前のことではあるが、アフガニスタンの調査に参加したとき、奥地の宿の二階（チャイハナ）に、床に三〇センチメートル四方の穴が開いている半畳ほどの小部屋があった。その穴をまたいで用便するのだが、ブタがその下で天から降ってくるご馳走にあずかろうと、文字通り首を長くして待っていた。

グローバリゼーションが進む昨今、トイレ文化が画一化され、旅先で変わったトイレに遭遇することもあまり期待できなくなってしまった。

厠（かわや）は何故恐い

常光 徹
（つねみつ とおる）

国立歴史民俗博物館教授

恐怖の空間

夕方誰もいない音楽室から流れてくるピアノの音、深夜に動き出す理科室のガイコツ模型、三回ノックをして「花子さーん」と呼びかけると返事が返ってくるという女子トイレ。子どもたちが話題にする学校を舞台にした怪談は多彩だが、それらの多くは校内の特定の空間と結びついて語られる傾向が強い。なかでもトイレには不思議な現象や妖怪話が集中している。

中高生に人気のある怪談にこんな話がある。夕方、忘れ物を取りに学校にもどった女子生徒が、ぼろぼろの白衣を身につけ髪を振り乱した女（亡霊）に追いかけられる。女子生徒はとっさにトイレのいちばん奥に隠れるが、女は手前から順にノックをしてドアをあけていく。まもなく、女子生徒のとなりのドアをノックする音がひびくが、何故か最後のドアをたたく音がしない。ほっとして立ち上がった女子生徒が顔を上げると、ドアの上から女の顔がじっと覗き込んでいた。

束の間の安堵感のあとに言い知れぬ戦慄（せんりつ）がはしり、恐怖が襲いかかってくるという、よくできたストーリーである。高い位置から見おろされている視線を意識したとき、人は誰しも背中に寒気がはしる。学校のトイレは天井を覆っていない造りがふつうで、まわりから完全に仕切られた個室の空間ではない。しかも、不特定多数の人間が使用する場所だけに、心のどこかに覗かれることへの不安があり、この話はそうした生徒の心理をうまく取り込んでリアリティを生み出している。

生理的な不安

それにしても怪談がトイレ空間に多いのは何故だろうか。すぐに思い浮かべたのは、以前の汲み取り式の、薄暗くてくさい便所の雰囲気だが、しかし、妖怪たちは明るくて水洗式の現在のトイレに頻繁に出没している。どうも、トイレの形態的な条件というよりも、そこを使用する人の行為と意識のうちに原因がひそんでいると予想される。基本的には、孤立した空間のなかで下半身を露出した状態のままかがむという、動物としての人間の弱点をさらけ出した姿勢が、抜き去りがたい不安をさそうのであろう。古くからある「厠に入ると下から手がでる」という怪談のモチーフが、今も色あせない不気味さを訴えてくるのも、こうした生理的な不安と無関係でないように感じられる。

人の気配を感じるようで
感じない静けさ…。
どこか異界とつながっているような
雰囲気がある

特集 トイレ

エコ・トイレと高層（=高槽）トイレ
—西アフリカでの体験から—

川田 順造
（かわだ じゅんぞう）

神奈川大学
日本常民文化研究所客員研究員

エコシステムで循環

トイレの思い出を西アフリカについてたどってみると、ふたつの、対極に位置付けられるかもしれない事例が思い浮かぶ。それぞれかなり広範囲に見られる。ひとつは、排泄行為も含めたヒトの営みが、生物界の循環系の一部であることをまじまじと思い出させてくれる、「エコ・トイレ」とでも名付けたくなるタイプのトイレだ。

海岸沿いの森林地帯でも、内陸のサバンナでも、村落では一般に設備としてのトイレというものはない。わたしがしばらく居候をさせてもらったコートディボワール南部森林地帯の、イネやヤムイモの農耕をおこなっているバウレ人の村では、森のなかの空き地に集村を作っている村人が排便するときは、村はずれの森に入ってしゃがむ。すると待ち構えたように放し飼いのブタが、たいていは親子など数頭で、喜びに鼻を鳴らしながらどこからともなくあらわれて、ヒトの大便を出るそばからきれいに食べてしまう。

ブタにはとくに餌は与えていないが、排便をする住民の数にくらべて、ブタの頭数はたいしたことはないから、ブタの食料のかなりの部分は村人の排泄物でまかなわれていたのではないだろうか。もっともブタは、アジアでも、それとは独立に家畜化されたとされるヨーロッパでも、人家のトイレの下に飼い、人糞も活用して養っていたのだから、ヒトとブタの食いつ食われつの関係は、西アフリカに限ったことではない。ただこのバウレの村で面白いと思ったのは、ブタの大便は、やはり放し飼いでいつもかなり飢えているイヌが、きれいに食べてしまうことだ。

わたしが長く暮らしたサバンナの、焼畑農耕を生業とする、二、三戸ずつかたまっているが全体としては散村の集落でも、ふだん食べるオクラやナスなどを作っている家のまわりで（挿画1）、作物の繁みにしゃがんで、村人は用を足す。家のまわりでとれるこれらの野菜は、トウジンビエやモロコシの粉を水に溶いて火にかけて練った（挿画2）、ソバ掻（か）きに似た主食をつけて食べる、汁の実にするのだ。

（挿画1）
サバンナの菜園＝
トイレのみのり、オクラの実

（挿画2）　穀粉を水に溶き
火にかけて練る

サバンナの農耕民モシのことばでは、この汁のことをゼードというのだが、面白いのはこの汁の実がとれる菜園＝トイレも、同じゼードということばでよぶのだ。何だ、フランス語でポタージュ（元来フランスの農民食で、食べ残しや固くなったパンなどをほうり込んだ野菜のごった煮汁）ということばに由来する、ポタジェ（家まわりの菜園）と同じじゃないか、とわたしは思った。ただ、フランスの田舎では、菜園はトイレではなく、トイレの床下でブタを養うのだから、エコシステムのなかでの循環のあり方が少し違ってはいる。

長い空洞を落下し乾燥

西アフリカ内陸の、とくにサハラ砂漠に向かって弓なりに突き出た、ニジェール川大湾曲部には、北アフリカとの交易で栄えた都市が古くから発達した。日干し煉瓦を積み上げて造った二階建ての人家が密集するこうした都市では、トイレは何と二階の屋上にあるのだ。つまり排便孔の下は、地面まで五、六メートルの高さの、一辺が一メートル余りはある直方体の密閉された、日干し煉瓦造りの筒になっている。上で排泄された便は、この高い空洞を落下して、底に蓄積されてゆくのだ。

この地方は乾燥がはげしいから、糞便はたちまち乾いて、第一密閉されているから、ハエが産卵してウジが湧いたりする恐れはないだろう。でも、何年か経てば、ひからびた糞が上まで積み上がるのでは…という、心配性の人類学者の質問には、そうなる前に、家が壊れて建て直すという答えが返ってきた。取り壊しのとき、蓄積され粉末化した糞便が、あたり一面に舞い上がるさまを想像して、思わず鼻をふさぎたくなるのは、狭い湿った国から来た人類学者の、取り越し苦労というものかも知れない。

ジェンネ市街地の高層トイレ、正面と右（マリ）

循環的活用
—中国—

横山 廣子
（よこやま ひろこ）

本館民族社会研究部

メタンガス・トイレの発酵槽

急激な経済発展をとげている中国では、最近、政府が補助金を出して農村部で新しいトイレの普及プロジェクトが進められている。それは衛生メタンガス・トイレあるいはエコ・トイレなどとよばれるものである。人や家畜の糞尿、生活汚水などを発酵槽にため、発生するメタンガスを炊事や照明用に使用する。衛生の向上とエネルギー不足問題とを一挙に解消する妙案というわけである。二〇〇七年中には国家予算の特別資金を使い、全国の二六〇万世帯の農家にこの設備を導入するという。

このトイレ・プロジェクトは、現実に直面する問題の厳しさに加え、中国におけるトイレを取り込んだ循環系の長い歴史を思い起こさせる。後漢時代の墓から明器（死後の生活のために道具や建物を模造した器物）として出土する陶楼のなかには、トイレの下に豚囲いが作られているものがあり、人間の糞便を豚の餌としていたことを如実に示している。これと同様の方式のトイレが残っている農村が今でも地方にはある。そもそも穢れや便所、豚小屋を意味する「溷」という漢字の存在は、古代からトイレと豚小屋とが一体となっていたことをあらわしてもいる。

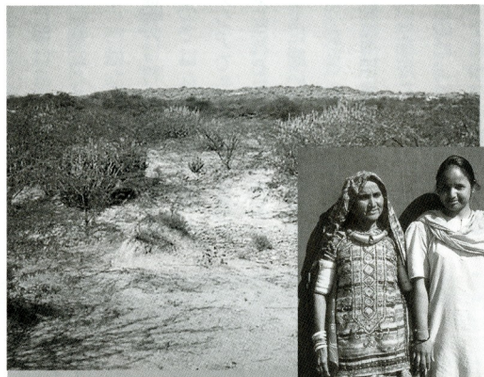
人糞の循環的活用という点では、もちろん、日本でもそうであったように、肥料としての利用が重要な位置を占める。一六世紀の半ばに中国を訪れたポルトガルの冒険商人、フェルナン・メンデス・ピントは、『東洋遍歴記』中で、人糞売買の盛行に驚いたと書いている。人糞を積み込む船がひとつの港に二、三〇〇隻も入港することがよくあり、富商も多かったという。買い付け人は求める品の名をあからさまに唱えることを避け、板を打ち鳴らしながら町を歩いて人びとに用件を知らせた。人糞は他の肥料より良質と見なされ、休耕地に改めて播種するときに用いられ、その効果が著しいため中国では年に三回も収穫があると記している。清代末期の『北京民間風俗百図』中にも「拾糞図」がある。桶を担ぎ、右手に鉄の掬い具、左手に灯りを提げている姿に浸透の度合いがうかがわれる。

「拾糞図」

トイレは野天で
—インド—

金谷 美和
（かねたに みわ）

本館外来研究員


低い灌木（かんぼく）の生える平原がトイレになる

トイレ事情に欠かせないギャザー・スカートや、スルワール・カミーズといった衣服

インドでは、トイレは野天である。都市部では、各家屋にトイレが整備されるようになっているが、農村ではトイレのない家屋も多い。用を足すときは、手に水の入った容器をもって、野外に出る。わたしの調査地であるインド西部カッチ地方は、雨が少ないために森がなく、石ころだらけの砂地が広がっている。適当な場所を見つけて、しゃがむのだ。用を足すと、右手で水を流しながら左手を使ってお尻を洗う。紙は用いない。

車で移動する旅の途中では、人家から離れて、また放牧のヤギや牛の見えない場所で、トイレ休憩をとる。長距離バスでの旅行でも、休憩所のトイレが清潔でないことが多く、乗客はバスを降りると人気のない方角に三々五々散っていく。小指を立てるのが、「おしっこに行きたい！」というボディ・ランゲージだ。

また、女性にとって気になるのは身体の露出であるが、この問題にはインドの衣服がよく機能し、解決してくれる。インド女性の衣服は布がたっぷりと用いられている。インド西部の伝統的な女性の衣服であるギャザー・スカートや、近年着用されるようになってきたサリーやスルワール・カミーズといった衣服は、しゃがんだとき女性の下半身をすっぽりと覆い隠してくれるのだ。これがTシャツにジーンズだったら大変だ。お尻は丸見えになってしまうし、人が来ないか周囲をうかがいながらしゃがむはめになってしまう。インド旅行をする女性は、Tシャツとジーンズ着用はやめたほうがいいと思う。

一九九七年にわたしがインドに来たばかりのころ、首都デリーで下宿していた大家に、なぜ孫娘にジーンズをはかせないのか聞いたことがある。デリーの大学ではおしゃれな女子学生のあいだでジーンズが流行し始めていたにもかかわらず、孫娘は一本のジーンズももっていなかったからだ。すると、大家は、「トイレのときに困るからだ」と一言。そのときのわたしはぴんと来なくて首を傾げたが、後に野天のトイレに行くようになって、合点がいったのである。インド女性のあいだでジーンズが普及しないのは、案外このようなところに理由があるのかもしれない。

日本との
トイレつながり
—トルコ—

木村 周平
（きむら しゅうへい）

東京大学大学院総合文化研究科

トルコ式トイレ。滑らないよう、足の踏み場がギザギザになっている。用を足した後、バケツの水で流す

トルコ人が「トルコ的であるもの」について語るとき、誇らしさと恥ずかしさが入りまじった、微妙な笑顔を見せることがある。トイレについて語るときもそうだ。たとえば、親しくなったトルコ人とチャイを飲みながら話していて、あなたがちょっと中座する。帰ってくると、彼（あるいは彼女）はおずおずとこう訊くかもしれない、「もうトルコ式は慣れた？」と。

「トルコ式（ア・ラ・トゥルカ）」、とよばれるトイレは、金隠しがなく、ドアを向いてしゃがむという違いはあるが、いわゆる和式とよく似ている。腰掛けタイプの洋式（トルコでは一般にア・ラ・フランガ、つまりフランク式とよぶ）に対してトルコ式、と自分の国の名前をつけているのも同じである。「トルコ式」はトルコ独自のものだ、と誇らしくもあり、一方でトルコがモダンでないことのあらわれのようで、ちょっと恥ずかしくもある。日本人が和式に対してもつ感覚とよく似たところがあるのではないだろうか。しかし、実際には多くの国でこのしゃがみ式・金隠しなし型のトイレが使われているのだが、それを知っているトルコ人は多くない。

ところで、こうした「トイレつながり」の日本とトルコが、実際にトイレをめぐって交流したことがある。それは一九九九年にトルコで起きた大地震の際で、日本から救援物資として簡易トイレが送られた。今年七月の新潟県中越沖地震でもあったように、災害で水道が止まるとトイレが使えなくなり、深刻な問題を生む。排泄物や臭いをどう処理するか、排泄の空間の快適さや安全性をどうやって確保するか…。逆にいえば、トイレがふだん何を可能にしてくれていたかが、そのときはじめて見えてくるのだ。

トルコの被災地では各国から送られたトイレが届く前に、路上にあるマンホールのふたを外して足場をつけ、即席の「トルコ式」トイレを作っていた人びともあったという。地震に負けない日常の回復は、日本でもトルコでもきっと、トイレとともにはじまっていくのだろう。

特集 トイレ